

新生児敗血症・髄膜炎罹患児の乳児期の成長について

研究協力者 安次嶺 馨

要約：当院NICUで、1981～1989年に入院治療した新生児敗血症・髄膜炎148例中、在胎37週以上の正期産児は43例であった。このうち死亡例、多発奇形例、また里帰り分娩などのため1年以上経過観察できなかった例などを除く21例について1年間の成長をみた。敗血症13例（男7、女6）、髄膜炎8例（男7、女1）のうち、出生体重2,500g未満の児は3割、2,500g以上の児は18例であった。12ヵ月時の身長・体重は全例とも-1S.D.以上の正常域にあった。頭囲は全例-2S.D.以上の正常域にあった。家庭において養育上、特別な問題はなかった。

見出し語：新生児敗血症・髄膜炎

研究目的：新生児敗血症・髄膜炎は死亡率が高く、また重篤な全身症状を呈するため、生存者の成長発達に影響を及ぼす可能性がある。今回は多くのリスクファクターを有する早期産児を除き、成熟児に限って敗血症・髄膜炎罹患後1年間の成長が正常児同様にみられるかを調べた。

対象・方法：当院NICUで1981年～1989年の9年間に経験した新生児敗血症・髄膜炎148例のうち、在胎37週以上の正期産児は43例であった。これらの例につき入院カルテより、在胎週数、出生体重、発症日齢、性別、細菌学的検査、感染症に対する治療などをretrospectiveに調べた。また退院後の経過観察で行った身体計測値を乳児成長曲線上にプロットし、成長を評価した。また定期検診以外に受診した理由についても調べた。

結果：43例の内、死亡例、多発奇形例、里帰り分娩などのため1年以上経過観察できなかった例が22例であった。1年以上観察した21例の内訳は次のとおりである。敗血症は13例で発症が日齢4以内の早発型10例、5日以上遅発型3例、髄膜炎は8例で早発型3例、遅発型5例であった。性別は男児14例（敗血症7、髄膜炎7）、女児7例（敗血症6、髄膜炎1）であった。出生体重は2,500g未満3例、2,500g以上18例であった。人工換気を行ったのは髄膜炎の1例で、交換輸血例はなかった。低血圧のためドパミンを使用したのは2例で、うち1例はPFCを併発した。髄膜炎の2例は抗けいれん剤を使用した。

成長についてみると、12ヵ月の時点で身長体重は全例-1S.D.以上の正常域にあった。また頭囲は全例-2S.D.以上の正常域にあった。発達に

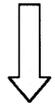
関して明らかな遅延や脳性麻痺の例はなかった。

外来受診理由は呼吸器感染、消化器感染、尿路感染など、一般の乳児と同様の傾向を示した。

考 察：新生児の敗血症・髄膜炎は生命予後の悪い疾患である。当院 NICU の 148 例中 17 例 (11.5%)、成熟児 43 例中 7 例 (16%) が死亡している。成熟児の起炎菌は GBS が 13 例と群をぬいて多い。我々の症例では生存例の成長は乳児期を通じて正常であり、家庭で養育する際に

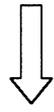
も特別な問題はなかった。栄養法に関してカルテから十分な情報は得られなかった。沖縄県の乳児栄養についての報告では母乳栄養率は 1 ヶ月で約 40%、3 ヶ月で約 30% であるので、今日の症例の栄養法もこれに準じて考えてよい。

成熟新生児の敗血症・髄膜炎の生命予後を左右するのは診断と治療開始の時期であろう。生存すれば、乳児期の成長と発達はほぼ正常な経過をたどる可能性が大きい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:当院 NICU で、1981～1989 年に入院治療した新生児敗血症・髄膜炎 148 例中、在胎 37 週以上の正期産児は 43 例であった。このうち死亡例、多発奇形例、また里帰り分娩などのため 1 年以上経過観察できなかった例などを除く 21 例について 1 年間の成長をみた。敗血症 13 例(男 7、女 6)、髄膜炎 8 例(男 7、女 1)のうち、出生体重 2,500g 未満の児は 3 割、2,500g 以上の児は 18 例であった。12 ヶ月時の身長・体重は全例とも $-1S.D.$ 以上の正常域にあった。頭囲は全例 $-2S.D.$ 以上の正常域にあった。家庭において養育上、特別な問題はなかった。